

教師が学校コンサルタントに求める 援助特性とストレスコーピングの関係

A relationship between perceptions of teachers about helping characteristics of school consultants and teachers' stress-coping.

谷 島 弘 仁*
Hirohito YAJIMA

キーワード：学校コンサルタント・ストレスコーピング・メンタルヘルス・教師

要約：本研究において、教師が学校コンサルタントに求める援助特性と教師のストレスコーピングとの関係について検討した。103名（男性47名，女性56名）の教師が調査に参加した。本研究においては、従来、小学校や中学校の学校種別に調査されていた教師のストレスコーピングを小学校教師と中学校教師の両者から構成される調査対象に対して実施した。その結果、性差や年齢差は認められたものの、学校種による差異は認められなかった。つぎに、教師が学校コンサルタントに求める援助特性と教師のストレスコーピングとの関係に関する結果は以下の通りであった。1) 教師がコンサルタントに対して求める援助特性の「信頼できる態度」および「問題解決志向」と教師のストレスコーピングの「積極的対処」に有意な正の相関が認められた。2) 教師がコンサルタントに対して求める援助特性と教師のストレスコーピングの「気分転換」および「回避」には有意な相関は認められなかった。最後に、本研究の限界と今後の課題について考察され、本研究の調査対象者が少ないことや小学校教師と中学校教師の両者に適用可能なコーピング尺度を開発することの必要性が課題として示された。

1. 問 題

最近、教師のメンタルヘルスの悪化が問題となっている（三沢，2011；中島，2006；野見山，2011；田中，2008）。その要因として、業務の増大や煩雑化、保護者への対応の複雑化、職場の人間関係などが指摘されている。教師のメンタルヘルスの悪化は職務遂行能力に影響し、児童・生徒への対応や授業の質的低下を引き起こす原因となる可能性が指摘されている（杉若・伊藤，2004）。このように、教師のメンタルヘルスの悪化に対処することは重要な課題である。しかし、

* やじま ひろひと 文教大学人間科学部

大変な状況の中で何とかメンタルヘルスを悪化させずに職務を遂行している教師も多いであろう。そのような教師の要因を分析し、メンタルヘルスの悪化を予防する方策を考えていくことも重要である。

教師のメンタルヘルスの問題はストレス理論の観点から論じられることが多い（溝口・岡野・中島, 2011）。大野（2010）によれば、コーピングとは「ストレッサーの存在で生じる不快な状態から逃れるための課題解決行動」であり、ストレスへの対処行動である。Lazarus & Folkman（1984）は、ストレスの心理社会的発生プロセスに関してトランスアクションル・モデルを提唱している。このモデルは、ストレッサー、ストレス反応、コーピングなどから構成されており、人と環境との相互作用による状況特異性や変動可能性を重視している。また、Lazarus & Folkman（1984）は、コーピングを問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングに分類している。大変な状況でもメンタルヘルスを悪化させずに職務を遂行している教師は、ストレスフルな状況に対して効果的なコーピングを使用していることが要因の一つと考えられる。コーピングについて検討することで、教師のメンタルヘルスの悪化を予防する方策を考える糸口が見つかる可能性があるだろう。

これまで、五十嵐・宮下・田中（2003）、松尾・清水（2008）、関山（2009）らにより教師のコーピングを測定する試みが行われている。五十嵐・宮下・田中（2003）は、田尾・久保（1996）によって作成された看護師対象のコーピング尺度をもとに34項目の教師コーピング尺度を作成し中学校教師272名に実施したところ、「問題直視」、「認知操作」、「気分転換」、「対人依存」、「問題回避」の5因子を見いだした。松尾・清水（2008）は、小学校教師版コーピング尺度を作成し、小学校教師367名に実施したところ、「共感的コーピング」、「回避的コーピング」、「援助希求コーピング」、「楽観的コーピング」の4因子を見いだした。松尾・清水（2008）は、これらの4因子の高次因子分析モデルを検討した。その結果、「共感的コーピング」と「援助希求コーピング」は「問題焦点型コーピング」の下位因子であり、「回避的コーピング」と「楽観的コーピング」は「情動焦点型コーピング」の下位因子であることが明らかとなった。関山（2009）は、教師向けのコーピング尺度ではなく、汎用のTri-axial Coping Scale 24（TAC-24; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995）により小学校教師のコーピングを測定した。その結果、情報収集コーピングの多用および肯定的解釈・計画立案・気晴らしコーピングの使用の少なさがストレス反応の生起に寄与していることが明らかとなった。また、校内の教師への相談は、4つのコーピング（カタルシス・情報収集・肯定的解釈・気晴らし）に相当する役割を果たしていることが明らかとなった。

関山（2009）の報告において、校内の教師への相談という社会的資源の活用はコーピングの機能を持つことが明らかにされているが、一方、校内における社会的資源としてスクールカウンセラーや心の教室相談員、スクールソーシャルワーカーなどの学校コンサルタントも存在している（Parsons, & Kahn, 2005; 渡辺, 1994; West & Idol, 1993; 谷島, 2010）。谷島（2010）は、教師がコンサルタントに対してどのような援助特性を求めるのかに関して検討し、21項目から構成される教師がコンサルタントに対して求める援助特性尺度を作成した。その結果、「教師への配慮」、「信頼できる態度」、「問題解決志向」の3つの因子を見いだした。教師がコンサルタントに対して求める援助特性と教師パーンアウトの関係については検討されているが（谷島, 2010, 2011）、教師のコーピングとの関係については検討されていない。そのため、本研究では、教師

がコンサルタントに求める援助特性と教師のコーピングとの関係を検討することにより、学校コンサルテーションが教師を支援するための資源としてどのように機能しているのかを明らかにすることを目的とする。

ところで、教師向けのコーピング尺度を開発した先行研究は、学校種ごとに独自のコーピング尺度を開発している（五十嵐ら，2003；松尾・清水，2008）。その理由として松尾・清水（2008）は、「教科担任制や学級担任制の違い、部活動指導の有無、生徒指導や保護者との関係など、教師の業務内容や職場環境は大きく異なり、所属する学校の種別により、教師のストレスや必要とするコーピング方略も異なることが予測される」ことを指摘している。しかし、筆者が調べた限りでは、教師のコーピングが学校種ごとに異なるかどうかについての実証的な比較検討はなされていない上に、そもそも教師を対象としてコーピングを測定する研究も数少ない（五十嵐ら，2003）。そこで、本研究では特定の学校種を対象とするのではなく小学校および中学校の教師を調査対象とし、小学校教師と中学校教師のコーピングの比較検討も行う。

2. 方法

(1) 調査対象：調査は、研修会で協力を依頼し、その場で回答を求める方法と、公立の小学校と中学校の校長に調査を依頼し、許可が得られた学校の教師に対して質問紙を配布し、回答を求める方法を併用した。茨城県の小学校1校、中学校3校から承認が得られた。教師104名から回答を得たが、回答に不備のあった1名の回答を除外し103名を分析対象とした。

(2) 調査時期：2010年5月～2010年8月。

(3) 調査内容

- 1) 教師がコンサルタントに求める援助特性：谷島（2010）によって作成された21項目を使用した（表1）。「教師への配慮」8項目、「信頼できる態度」7項目、「問題解決志向」6項目から構成されている。谷島（2010）によれば、「教師への配慮」は、コンサルテーションの受けやすさや、コンサルタントと教師の関係づくりと関連しており、コンサルテーションの前提として人間関係づくりを表しているとされる。「信頼できる態度」は、コンサルテーションの関係を進展させるための核となる因子であるとされる。「問題解決志向」は、問題解決に向けたコンサルタントのより積極的かつ具体的なサポートを表すとされている。これらの尺度には教師の性差、年齢差、学校種差は認められなかった。実施方法は、谷島（2010）に従った。回答形式は4件法であり、「たいへんあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4段階に対して4点～1点を与えた。
- 2) 教師コーピング：五十嵐ら（2003）は、看護師対象のコーピング尺度（田尾・久保，1996）を教師向けに改変して教師コーピング尺度34項目を作成しており、本研究では34項目をそのまま使用した。回答形式は4件法であり、「たいへんあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4段階に対して4点～1点を与えた。
- 3) 個人的属性：個人的属性に関する項目として、性別、年齢、校種、コンサルテーションを受けた経験について尋ねた。

表 1 教師がコンサルタントに求める援助特性尺度の項目例

[教師への配慮]

教職員とのコミュニケーションが円滑である。
相談室にこもらず、なるべく教職員と接するように努めている。
常日頃、教職員に対して気軽に声をかけている。
いつでも笑顔で迎えてくれる。

[信頼できる態度]

児童生徒への対応方法を親身になって考えてくれる。
教師の話をよく聞こうとする姿勢がある。
児童生徒の問題を積極的に理解しようとしている。
教師が、児童生徒の問題に多様な方法で関わられるように、手助けしてくれる。

[問題解決志向]

児童生徒の状況を実際に見た上で問題を見立てている。
コンサルテーションが終わった後でも、その問題を気にかけてくれる。
教師の必要性に応じて迅速に対応してくれる。
児童生徒の問題を具体的に説明してくれる。

3. 結果

(1) 個人的属性

本研究の調査対象の性別は、男性 47 名、女性 56 名であった。年齢は、20 歳代 10 名、30 歳代 23 名、40 歳代 32 名、50 歳代以上 38 名であった。校種は、小学校 38 名、中学校 65 名であった。過去にコンサルテーションを受けた経験については、72 名が受けたことがあると回答し、30 名が受けたことがないと回答した（1 名無回答）。

(2) コーピング尺度の検討

五十嵐ら（2003）は、中学校教師のコーピングを測定する項目として 34 項目を収集し、項目分析および因子分析の結果から、5 因子（22 項目）が認められた。本研究では小学校教師も対象としているため、五十嵐ら（2003）によって収集された教師のコーピングを測定する 34 項目に対して改めて項目分析を行った（表 2）。その結果、7 項目にフロア効果が認められたため、これらの項目を除外した。フロア効果が認められた項目は、1 項目を除き五十嵐ら（2003）と同様であった。残った 27 項目に対して因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行ったところ、3 因子が得られた。因子負荷が 1 つの因子について .40 以上であり、複数の因子に .40 以上の負荷を示さない項目を選んだところ、第 1 因子が 7 項目、第 2 因子が 6 項目、第 3 因子が 3 項目が該当した。項目内容から、第 1 因子を「積極的対処」（ $\alpha = .79$ ）、第 2 因子を「気分転換」（ $\alpha = .72$ ）、第 3 因子を「回避」（ $\alpha = .54$ ）と名づけた（表 3）。「回避」因子の α 係数が低いものの、その他の因子は信頼性が認められたため、各因子に該当する項目により下位尺度を構成した。

表2 コーピング尺度項目の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
1. 関連する文献を読んで勉強し直した。	2.42	0.82
2. 誰かに話を聞いてもらった。	3.04	0.73
3. 仕方がなかったと割り切った。	2.83	0.71
4. 管理職や同僚に、個人的に相談した。	2.51	0.80
5. 職員会議や部会などで検討してもらった。	2.14	0.77
6. じっと我慢した。	2.22	0.91
7. その問題を避け、忘れるようにした。	2.17	0.85
8. 仕事以外のこと（趣味やスポーツ）に取り組んだ。	2.81	0.74
9. 物事を良い方向に考えるようにした。	3.10	0.66
* 10. 休暇をとって、心身の休養をはかった。	1.91	0.94
11. もう一度、一生懸命やり直した。	2.43	0.80
* 12. お酒を飲んだ。	1.92	1.00
13. 行楽や旅行に出かけた。	1.93	0.90
14. 誰かに頼んで、問題解決に協力してもらった。	2.35	0.82
15. ポーッととして、とりとめのない物思いにふけた。	1.90	0.86
16. 過去の経験に照らしてみた。	2.52	0.81
* 17. 薬や栄養剤を服用した。	1.32	0.64
18. 別の楽しいことを考えた。	2.44	0.74
19. くよくよしないよう心がけた。	2.83	0.80
20. 問題点をはじめから見直した。	2.51	0.71
* 21. 信仰を心のよりどころとした。	1.11	0.39
22. 話し合って、妥協できる場所を探した。	2.25	0.83
23. ショッピングに出かけた。	2.36	1.01
* 24. 関連する研修会に参加し、勉強し直した。	1.68	0.79
25. あせらないように心がけた。	2.67	0.79
26. 難しい問題をあとまわしにした。	2.03	0.71
27. 児童生徒と雑談をしたり、遊んだりした。	2.38	0.86
* 28. 誰かに八つ当たりをした。	1.43	0.67
29. たくさん眠るようにした。	2.49	1.00
* 30. たばこを吸った。	1.31	0.83
31. 感情を率直に表現した。	2.14	0.73
32. 食べたいものをたくさん食べた。	2.26	0.96
33. 他にやり方がないか、自分で工夫した。	2.53	0.75
34. 家族と過ごす時間を増やした。	2.45	0.87

注：*のついた項目は、フロア効果が認められたため除外した。

表 3 コーピング尺度の因子分析結果

質問項目	因子 I	因子 II	因子 III
第 1 因子: 積極的対処 (7 項目)			
問題点をはじめから見直した。	.86	-.14	-.12
過去の経験に照らしてみた。	.67	-.16	.12
他にやり方がないか、自分で工夫した。	.64	.02	-.05
話し合って、妥協できる場所を探した。	.60	.08	-.24
職員会議や部会などで検討してもらった。	.53	-.12	-.20
もう一度、一生懸命やり直した。	.48	-.02	.02
あせらないように心がけた。	.48	.18	.15
第 2 因子: 気分転換 (6 項目)			
ショッピングに出かけた。	-.07	.73	-.08
食べたいものをたくさん食べた。	-.13	.72	-.12
たくさん眠るようにした。	.00	.53	.18
行楽や旅行に出かけた。	-.22	.53	-.06
家族と過ごす時間を増やした。	.01	.53	-.05
誰かに話を聞いてもらった。	-.06	.48	-.19
第 3 因子: 回避 (3 項目)			
じっと我慢した。	.01	-.27	.59
仕方がなかったと割り切った。	-.03	-.07	.56
ボーッとして、とりとめのない物思いにふけた。	-.10	.24	.46
因子間相関	因子 II	.27	
	因子 III	-.05	.13

(3) コーピングと個人的属性の関係

コーピングが教師の個人的属性とどのように関係しているのかを検討した。個人的属性の各項目を独立変数、コーピングの各因子を従属変数とする t 検定および一元配置分散分析を行った。その結果、性差と年齢差が認められたが、校種、コンサルテーションを受けた経験についての差異は認められなかった。表 4 に示されている通り、性差については「気分転換」は女性の得点が男性の得点よりも有意に高かった ($t = -4.75, p < .01$)。また、表 5 に示されている通り「気分転換」においては年齢差が認められた ($F = 6.07, p < .01$)。Tukey 法により多重比較を行ったところ、20 歳代は 40 歳代よりも得点が有意に高く、20 歳代は 50 歳代よりも得点が有意に高かった。

表 4 コーピング尺度の各因子における性差

因子	男性	女性	df	t 値
積極的対処	17.24 (3.55)	16.89 (3.80)	96	.48
気分転換	12.87 (3.37)	15.91 (3.12)	101	-4.75**
回避	6.94 (1.96)	6.95 (1.97)	100	-.03

**: $p < .01$, () 内は標準偏差

表5 コーピング尺度の各因子における年齢差

因子	20歳代 n=10	30歳代 n=21	40歳代 n=31	50歳代以上 n=38	F値	多重比較
積極的対処	14.6 (4.43)	17.48 (3.23)	17.10 (3.48)	17.44 (3.65)	1.80	n.s.
気分転換	17.60 (2.84)	15.74 (3.35)	14.31 (3.63)	13.16 (3.14)	6.07**	20歳代>40歳代 20歳代>50歳代以上
回避	7.40 (1.43)	6.87 (1.96)	7.29 (1.58)	6.58 (1.94)	1.13	n.s.

**: $p<.01$, n.s.: not significant, () は標準偏差

(4) 教師がコンサルタントに求める援助特性とコーピングとの関係

教師がコンサルタントに求める援助特性の3因子とコーピングの3因子との相関について検討した(表6)。その結果、教師がコンサルタントに求める援助特性の「信頼できる態度」とコーピングの「積極的対処」の間に5%水準で有意な正の相関が認められた($r=.25$)。また、「問題解決志向」と「積極的対処」の間に5%水準で有意な正の相関が認められた($r=.21$)。

表6 教師がコンサルタントに求める援助特性とコーピングとの相関結果

コーピング	教師がコンサルタントに求める援助特性		
	教師への配慮	信頼できる態度	問題解決志向
積極的対処	.14	.25*	.21*
気分転換	.02	-.02	-.03
回避	.06	-.02	.06

*: $p<.05$

4. 考察

(1) コーピング尺度について

本研究は、教師がコンサルタントに求める援助特性と教師のコーピングとの関係を検討することにより、学校コンサルテーションが教師を支援するための資源としてどのように機能しているのかを明らかにすることを目的とした。

本研究では、教師のコーピングを測定するために五十嵐ら(2003)によって作成された中学校教師用コーピング尺度を使用した。五十嵐ら(2003)は、田尾・久保(1996)によって作成された看護師対象のコーピング尺度をもとに34項目の教師コーピング尺度を作成し、中学校教師272名に実施したところ、「問題直視」、「認知操作」、「気分転換」、「対人依存」、「問題回避」の5因子を見いだしている。本研究においては、因子分析の結果、「積極的対処」、「気分転換」、「回避」の3因子が得られた。各因子に高く負荷している項目から判断すると、五十嵐ら(2003)に

における「問題直視」、「認知操作」、「対人依存」の各因子に含まれる項目が本研究では「積極的対処」の1因子にまとまった。松尾・清水（2008）による高次因子分析モデルの結果や各因子の項目内容から判断すると、「積極的対処」因子はLazarus & Folkman（1984）の問題焦点型コーピングに相当し、「気分転換」因子と「回避」因子は情動焦点型コーピングに相当するものと思われる。

教師向けのコーピング尺度を開発した先行研究では学校種ごとに独自のコーピング尺度を開発しているが、教師のコーピングが学校種で異なるかどうかについての実証的な比較検討はなされていないため、本研究においては小学校および中学校の教師を調査対象とし両者におけるコーピングの比較検討を行った。コーピング尺度の3因子に対して学校種（小学校・中学校）を独立変数、コーピングの各因子を従属変数とする t 検定を行ったところ、有意な差異は認められなかった。性差や年齢差は認められていることから、少なくとも五十嵐ら（2003）による尺度で測定された教師のコーピングは、どこに勤めているかに依存する状況的な性質というよりも個人によって異なる特性的な性質を持つ可能性が示唆された。コーピングを測定する尺度には状況的側面と特性的側面のそれぞれを測定する尺度が開発されている（佐々木, 2006）。しかし、コーピング尺度においてしばしば見受けられる誤りは、特性的コーピングを測定する尺度を信頼性や妥当性を吟味することなく状況的コーピングの測定に用いることや、その逆のケースであるという。教師のコーピングの測定においても特性的コーピングと状況的コーピングという視点からの検討が必要とされよう。

（2）教師がコンサルタントに求める援助特性とコーピングとの関係について

教師がコンサルタントに求める援助特性の3因子とコーピングの3因子との相関係数を算出したところ、教師がコンサルタントに求める援助特性の「信頼できる態度」とコーピングの「積極的対処」の間に有意な正の相関が認められ、「問題解決志向」と「積極的対処」の間に有意な正の相関が認められた。この結果は、問題焦点型のコーピング方略を使用する傾向のある教師は、コンサルテーションを問題解決の資源として認識していることを示唆している。Lazarus & Folkman（1984）によれば、問題焦点型コーピングはストレスに直接働きかけて改善しようとする対処方略であり、このコーピングを使用する傾向のある教師はストレスに直接働きかけて改善しようとする意欲を持っているものと思われる。そのような教師にとって、学校コンサルタントによるコンサルテーションは問題解決の手段として認識されていることが示された。しかし、相関は有意ではあったが、相関係数は0.2台であり低い値であった。その理由として考えられることは、本研究ではコンサルテーションを受けた経験や今後の希望により教師をグルーピングすることなしに調査を行っていることが挙げられる。コンサルテーションを受けた経験がなく今後受けることを希望していない教師なら、コンサルタントに求める援助特性をイメージすることは困難であろう。今後、コンサルテーションを受けた経験や今後の希望により教師をグルーピングして分析を行うことが必要とされる。また、教師がコンサルタントに求める援助特性の「信頼できる態度」・「問題解決志向」とコーピングの「積極的対処」の間に有意な正の相関が認められたものの、「教師への配慮」との間には有意な相関は認められなかった。谷島（2010）によれば、「教師への配慮」は、コンサルテーションの受けやすさや、コンサルタントと教師の関係づくりと関連しており、コンサルテーションの前提としての人間関係づくりを表している。

問題焦点型のコーピング方略を使用する傾向のある教師は問題を解決する意欲が強く、コンサルテーションの受けやすさは求めていることが考えられる。ただし、本研究では、問題焦点型のコーピング方略を使用する傾向のある教師が問題解決の資源としてコンサルテーションを認識していることが示唆されたのみであり、これらの教師が実際にコンサルタントにコンサルテーションを求めるかどうかは明らかにされていないため、今後検討することが必要とされる。

つぎに、教師がコンサルタントに対して求める援助特性と教師のストレスコーピングの「気分転換」および「回避」には有意な相関は認められなかったことについて考察する。前述した通り、松尾・清水（2008）による高次因子分析モデルの結果や各因子の項目内容から判断すると「気分転換」因子と「回避」因子は情動焦点型コーピングに相当するものと思われる。情動焦点型コーピングは、ストレスによって引き起こされる、行きすぎた感情的な心理的反応をコントロールすることでストレスに対する冷静な対処を可能にすること目的としており、問題解決そのものに向けられたコーピングではない。そのため、これらのコーピングを使用する傾向のある教師のコンサルテーションの評価には、教師の個人差が大きく反映されたものと考えられる。

（3）今後の課題

本研究の限界としてあげられることは、第一に調査対象者が少ないことである。本研究の調査対象者は小学校教師と中学校教師を併せて103名であり、分析結果の精度を上げるためにはより多くの教師を対象として調査を行う必要がある。第二に、コーピングを測定する尺度の問題である。五十嵐ら（2003）による尺度で測定された教師のコーピングは学校の種類によって左右されるより、むしろ個人によって異なる特性的な性質を持つ可能性が本研究において示唆されたが、この結果が五十嵐ら（2003）による尺度のみにあてはまるのか、教師を対象とした他のコーピング尺度にもあてはまるのかは明らかではない。佐々木（2006）によれば、コーピング研究はこれまでに膨大な蓄積がなされているにもかかわらず、特性的コーピングと状況的コーピングの比較対照という視点での研究は発展途上の段階であるという。また、特性的コーピングと状況的コーピングを比較対照することが可能な測定尺度を開発することも必要であることが指摘されている。教師を対象としたコーピングの測定においても、特性的コーピングと状況的コーピングを比較対照することが可能な測定尺度を開発することが求められる。最後に、教師がコンサルタントに求める援助特性の測定について、コンサルテーションを受けた経験や今後のコンサルテーションの希望により教師をグルーピングして分析を行うなどの工夫をすることが必要とされよう。

引用文献

- 五十嵐守男・宮下敏恵・田中輝美（2003）「中学校教師におけるコーピング尺度の作成」『上越教育大学心理教育相談研究』2 pp.25-34
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二（1995）「対処方略の三次元モデルと新しい尺度（TAC-24）の作成」『教育相談研究』33 pp.41-47
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984) *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer, Publishing Company. (ラザルス, R.S.・フォルクマン, S. (著) 本明寛・春木豊・織田正美 (監訳) (1991) ストレスの心理学— 認知的評価と対処の研究 — 実務教育出版)
- 松尾一絵・清水安夫（2008）「小学校教師特有のストレスコーピングに関する研究— 尺度開発と尺度モデルの検討」『パーソナリティ研究』16 pp.435-437

- 三沢元彦 (2011)「小・中学校教師のメンタルヘルスの規定因 — 小中男女の比較を通して —」『法政大学大学院紀要』67 pp.215-228
- 溝口るり子・岡野真紀子・中島恵 (2011)「教師のメンタルヘルスマネジメント」『子どもの心と学校臨床』4 pp.60-67
- 中島一憲 (2006)「教師のメンタルヘルス — 最新データによる臨床的検討 —」『学校メンタルヘルス』8 pp.35-41
- 野見山晃 (2011)「教師のうつ病事情 — 教師の休職の現状を踏まえて」『子どもの心と学校臨床』4 pp.32-42
- 大野太郎 (2010)「ストレス・コーピングの理論」『児童心理』64 (17) pp.41-46
- Parsons, R. D. & Kahn, W. J. (2005) *The School Counselor as Consultant: An integrated model for school-based consultation*. Belmont, CA: Brooks/Cole
- 佐々木恵 (2006)「特性的・状況的コーピングと適応」谷口弘一・福岡欣治 (編著) (2006)『対人関係と適応の心理学 — ストレス対処の理論と実践』北大路書房 pp.39-52
- 関山徹 (2009)「小学校教師における心理的ストレス過程」『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編 60 pp.309-319
- 田中輝美 (2008)「中学校教師の精神的健康に関する研究 — 日本版 GHQ 精神健康調査票を用いて —」『筑波大学学校教育論集』30 pp.1-6
- 田尾雅夫・久保真人 (1996) *バーンアウトの理論と実際 — 心理学的アプローチ* 誠信書房
- 杉若弘子・伊藤佳代子 (2004)「小・中学校教員のストレス経験 — 尺度の開発と現状分析 —」『奈良教育大学紀要』53 (1) pp.55-62
- 渡辺三枝子 (1994)「コンサルタントとしてのカウンセラーの教育：カウンセラー研修におけるコンサルタント教育」『明治学院論叢心理学紀要』540 (4) pp.32-36
- West, J. F., & Idol, L. (1993) The counselor as consultant in the collaborative school. *Journal of Counseling and Development*, 71 pp.678-683
- 谷島弘仁 (2010)「教師が学校コンサルタントに求める援助特性に関する検討」『教育心理学研究』58 pp.57-68
- 谷島弘仁 (2011)「教師が学校コンサルタントに求める援助特性と教師バーンアウトの関係」『文教大学生生活科学研究』33 pp.67-77
- 安川禎亮 (2010)「教師のストレス・コーピング」『児童心理』64 (17) pp.101-105

謝辞および付記

本研究の実施にあたって、那珂市立横堀小学校校長 加倉井正先生、城里町立桂中学校校長 小林孝志先生、ひたちなか市教育委員会指導室指導主事 中村純治先生、ひたちなか市立勝田第二中学校校長 坏拓男先生、同校教諭 臼井義彦先生、那珂市立第三中学校校長 綿引和郎先生 (調査当時)、同教頭 鴨志田太先生にご協力を賜りました。心より深く感謝するとともに、厚くお礼を申し上げます。

本研究の内容は、日本学校心理学会第13回大会 (平成23年10月10日、信州大学) において発表した。